

## 調査報告

## 「看護研究Ⅱ」教育評価の検討

—学生と教員の自己評価より—

井上 由紀子・永谷 智恵

(2012年12月25日受稿)

**抄録：**本研究の目的は、第一期生の「看護研究Ⅱ」の学習状況と指導状況について学生と教員の自己評価結果から明らかにすることである。対象は、看護研究Ⅱを受講した学生と指導に携わった教員で同意が得られた学生64名と教員11名である。方法は、看護研究プロセスの学習状況および指導状況を問う独自に作成した自己評価10項目の自記式質問紙調査である。その結果、「研究テーマの設定」は学生60%以上、教員45%が「できた」と評価する一方、「文献クリティーク」は学生、教員ともに評価は低く文献精読の困難さとその指導の必要性が顕著となった。「研究計画書作成」は学生が「できた」と評価する反面、教員は「どちらとも言えない」と評価し文章表現等に指導を要していた。「データ収集」「データ分析」の自由記載からは学生、教員ともに限られた時間で苦慮している状況が確認された。「研究論文作成」「研究抄録作成」「研究発表」は学生、教員ともに50%以上が「できた」と評価し、70%以上が今後の臨床に役立つと評価していた。また、「看護研究Ⅰ」の学習と「看護研究Ⅱ」の学習の積み重ねを明確にする必要性が明らかとなった。

## I. はじめに

看護教育のなかに研究的態度を身につけることの重要性が説かれたのは、1967年度のカリキュラム改正にはじまる。その後、1989年度のカリキュラム改正<sup>1)</sup>を契機に各看護大学では、独自の個性ある看護研究指導の取り組みが行われ、多くの大学が4年間の最後を締めくくる包括的なものとして卒業研究を位置づけるようになった<sup>2, 3)</sup>。卒業研究を行う主な目的は、看護研究の意義を理解し講義や実習を通して抱いた疑問や興味について、それを単なる疑問や興味に終わらせず実証し、論術する過程を体得することである。また、文献活用方法や論文の書き方ばかりではなく、問題解決思考の基礎能力を培っていくこと、基礎教育課程の統合としての学習であること、さらに専門職としての発展の基盤ともなる学習であるなど卒業研究の意義と必要性に関する考え方はさまざま

である<sup>2-5)</sup>。一方、今日、看護系大学が増加するなかで学士課程における研究をどのように教育するか、また、どのような能力を身につけることを目指すのか、議論されている現状がある。その理由としては、学生の能力が二分化されるなかで、臨地実習と並行して国家試験対策があり、さらに看護研究を課すことに困難な学生もいるという現実である<sup>6)</sup>。また、私学においては大学の教育理念や目標と直結して、どのような学生を育てたいのかに関連して看護研究の目標設定を明確にする必要性も指摘されている。このように、「卒業研究」あるいは「看護研究」など名称は異なるにしても看護基礎教育カリキュラムのなかで、「看護に関する研究」教育のあり方が問われている。私学の各看護大学では、教育理念を拠り所として4年間の教育のなかで看護研究をどう位置づけるか、目的をどこにおくか試行錯誤している現状がある。

たとえば、看護研究の到達目標を研究計画書作成とする大学、あるいは研究論文作成までとする大学などさまざまである<sup>7)</sup>。

本学の看護学科は2008年に開設し、カリキュラムにおいて「看護研究」教育は、3年次前期に「看護研究Ⅰ」、4年次通年科目として「看護研究Ⅱ」を位置づけている。その目的は、看護研究の意義を理解し、講義、演習、実習等の経験から探求したい関心領域を見出しテーマ設定からデータ収集分析および論文作成まで一連の研究プロセスを実践することである。学生は、新カリキュラム導入により、領域別看護学実習に加え、統合継続看護学実習が組み込まれるなか実習と研究、同時に就職活動、国家試験対策を並行して取り組んだ。

そこで、本研究は第一期生の「看護研究Ⅱ」の取り組みについて学生と教員の自己評価結果から学習状況と指導状況を明らかにすることを目的とした。また、今回の結果をもとに「看護研究」指導のあり方の一助とする。

## Ⅱ. 「看護研究Ⅱ」の位置づけと学習概要

本学の看護研究科目は、3年次前期必修科目1単位30時間として「看護研究Ⅰ」、4年次通年必修科目2単位90時間として「看護研究Ⅱ」を配置し、いずれも専門科目の基礎看護学に位置づけている。看護研究Ⅰおよび看護研究Ⅱの学習目標および授業概要については表1に示した。看護研究Ⅱの具体的な学習進行状況を以下に示す。

### 1. 看護研究Ⅱオリエンテーション

3年次終了3月に科目オリエンテーションが行われ4年次学期初めに研究テーマと希望領域について指定の用紙に記入し提出する。これらは科目責任者が中心となり協議し研究領域が決定される。その後、7領域の助教以上の看護系教員が研究を担当し、学生はそれぞれの領域の担当教員から個別指導を受け論文提出までの全体スケジュール作成、研究課題の明確化に取り組んでいくことになる。学生の興味・関心から各領域1グループ4-5名の学生でグループ編成される。

### 2. 研究計画書の作成と倫理審査

学生68名は20グループに編成された。学生は5月初旬から8月初旬まで領域別看護学実習と継続統合看護学実習を行っており、個々の学生の実習状況により領域毎に指導体制は異なる。しかし、担当教員の指導のもと7月末に全グループが研究計画書を提出する。倫理審査は、講師以上の看護系教員が分担して審査に当たり2週間以内に学生に返却される。学生は倫理審査の結果を受け、担当教員の指導のもと具体的な研究に取り組むことになる。

### 3. 論文および抄録の提出

論文および抄録の執筆と提出要領については10月中旬に提示し12月初旬に提出期日とした。論文、抄録ともに各グループで作成し提出する。

### 4. 研究発表会

発表は口頭発表として1グループ発表7分間、質疑応答8分間(1グループ15分間)である。20グループの学生が交代で司会進行とタームキーパーを担当し、パワーポイントを用いて研究成果を発表した。

表1 看護研究Ⅰおよび看護研究Ⅱの授業概要

<p><b>【看護研究Ⅰ】</b>            学習目標：1. 研究の意義およびその必要性が理解できる。            2. 研究における倫理の重要性を理解できる。            3. 研究方法の種類とその特徴が理解できる。            4. 研究計画書を作成できる。            授業概要：看護研究の意義、すなわち看護研究が看護の質の向上をはかるため、あるいは専門職者として常に求められる活動であることを理解する。さらに、看護研究の目的、研究方法、データ分析、研究論文の批判、論文の書き方などの基礎的知識、技術、態度を抗議と課題演習を通して学ぶ。            授業内容：看護研究の意義と研究倫理、文献検索方法や研究方法などの基本的知識を講義形式で学習した後、グループワークにより研究テーマの設定し文献検索、研究方法の選択、倫理的配慮までの研究計画書を作成しグループ毎に発表。</p>
<p><b>【看護研究Ⅱ】</b>            学習目標：1. テーマを選択し文献検索、研究計画の立案、データ収集、分析、論文作成の一連の研究過程を実践する。            2. 研究論文を作成することができる。            3. 看護研究発表会で研究成果を発表する。            授業概要：既習の諸学を通して得た看護研究に関する知識を活用し、講義、演習、看護学実習等の経験から探求したい関心領域を見出す。教員の指導のもと「看護研究Ⅰ」で習得した看護研究に関する知識、技術、態度を活用し、看護または医学・保健衛生の視点からの指導のもと、研究計画書を立案し研究論文・抄録を作成し発表する。            授業内容：本文に記載</p>

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 対象者

看護研究Ⅱを受講した看護学科4年生68名と看護研究Ⅱの指導に携わった教員17名である。

#### 2. 調査期間

2012年3月17日

#### 3. 調査方法

##### 1) 自記式質問紙調査

看護研究プロセスの学習状況および指導状況を問う独自に作成した自己評価10項目の自記式質問紙調査を行った。研究のプロセスに関する内容は、「研究テーマの設定」「研究テーマに関する文献検索およびクリティーク」「研究計画書の作成」「データ収集」「データ分析」「研究論文の作成」「研究抄録の作成」「研究発表」の8項目である。その他、「看護研究Ⅱの学習を進めるにあたり看護研究Ⅰの学習は役に立ったか」「看護研究Ⅱの学習は今後の臨床や職場に役に立つと思うか」の2項目を設け、計10項目について5段階評価とした。また、質問毎に自由記載欄を設けた。

##### 2) 調査および回収方法

学生には卒業式終了後に調査目的および方法を文書と口頭で説明し質問紙を配布した。教室に回収箱を設置し時間経過後に回収した。教員には学科会議で研究目的等を文書で説明し承認を得た後、質問紙を配布し研究者の郵便ボックスを回収箱とした。

#### 4. 分析方法

各質問項目は単純集計し、自由記載の分析は質問項目毎に内容の類似性によって帰納的に分類し要約した。

#### 5. 倫理的配慮

対象者である学生には、調査目的と方法および調査の意義と結果の公表について文書を用いて口頭で説明した。また、協力は任意であること、無記名で個人が特定されないこと、不参加の場合でも不利益はないこと、成績には一切関係ないこと、調査で得た情報は調査以外には使用しないことについて文書を用いて口頭で説明した。回収箱への

投函をもって同意を得たものとした。教員へは学科会議で、今回の研究に関する研究計画書、研究依頼文、質問紙調査用紙を配布し口頭で説明し承認を得た。説明後メールで用紙を配布し郵便ボックスの投函をもって同意を得たものとした。

### Ⅳ. 結果

配布した質問紙のうち回収された学生64部（回収率94%）と教員11部（回収率65%）を分析対象とした。自由記載については、学生は総記録数211、教員は総記録数151を分析対象とした。学生の自己評価結果および自由記載内容の要約は表2に、教員の自己評価結果および自由記載内容の要約は表3示した。以下、質問項目は「」、自由記載内容の要約を『』で示す。

#### 1. 学生の自己評価

「研究テーマの設定について」は、14名（22%）が「よくできた」、27名（42%）が「できた」と評価し、「どちらとも言えない」は20名（31%）、「できなかった」は3名（5%）であった。自由記載では、『グループで話し合い協力してできた』『興味あるテーマが設定できた』『教員の助言で設定できた』『研究Ⅰで学べたからできた』と評価する一方で、『どんどん変わってしまった』『難しかった』『もっと考えればよかった』であった。

「研究テーマに関する文献検索およびクリティークについて」は、「どちらとも言えない」が40名（63%）と最も多かった。一方、「よくできた」と評価した学生は4名（6%）、「できた」は17名（26%）、「できなかった」は3名（5%）であった。自由記載では、『グループ内で協力してできた』『多くの文献を繰り返し読むことで理解できた』『教員の助言・サポートからできた』『研究Ⅰで行っていたのでできた』と評価する反面、『クリティークの方法を理解していなかった』『実際に良かったか自信がない』『文献が予想以上に集まらなかった』であった。

「研究計画書の作成について」は、「よくできた」

は6名(10%),「できた」は27名(42%),「どちらとも言えない」は27名(42%),「できなかった」は4名(6%)であった。自由記載では、『時間をかけ順序立ててできた』『グループメンバーで協力してできた』『教員の指導, 協力でできた』また『実習中で十分に力を入れることができなかった』『クリティークについて不安があった』などであった。

「データ収集について」は、「よくできた」は10名(16%),「できた」は22名(34%)で、「どちらともいえない」は29名(45%),「できなかった」は3名(5%)であった。自由記載では、『必要なデータを得ることができた』『グループメンバーで協力してできた』『教員の協力で収集できた』また『PCや図書館で入手可能な文献が少なかった』『十分なデータが収集できなかった』『データ収集の方法がわからず戸惑った』であった。

「データ分析について」は、「どちらとも言えない」が32名(50%)と最も多かった。一方、「よくできた」は4名(6%),「できた」は24名(38%),「できなかった」は3名(5%)であった。自由記載では、『教員の指導・助言でできた』『グループメンバーで協力してできた』『事前に方法を考えていた』また『分析方法を理解するのが難しかった』であった。

「研究論文作成について」は、「よくできた」は8名(13%),「できた」は32名(50%),「どちらとも言えない」は20名(31%),「できなかった」は4名(6%)であった。自由記載では、『教員の指導, 助言でできた』『グループメンバーで協力, 分担してできた』『細かい箇所もできた』また『間違いがあった』『文章の内容, 図の課題が多かった』であった。

「研究抄録について」は、「よくできた」は7名(11%),「できた」は27名(42%)で、「どちらとも言えない」は26名(41%),「できなかった」は4名(6%)であった。自由記載では、『論文を丁寧に作っていたので要点を書けた』『教員の助言が大きかった』『グループメンバーで努力した』

また『まとめるのが難しかった』『確認せず間違いがあった』『論文に追われて大変だった』などであった。

「研究発表について」は、「よくできた」は18名(29%),「できた」は22名(34%),「どちらとも言えない」は20名(31%),「できなかった」は4名(6%)であった。自由記載では、『自分たちの成果を時間内に明確に伝えることができた』『事前準備してパワーポイントも工夫した』『メンバーで協力した』また『当日スライドに不備があった』『時間内に終わらなかった』『質問や思った事をうまく言えなかった』などであった。

「看護研究Ⅱを進めるにあたり看護研究Ⅰの学習は役に立ったか」については、「どちらとも言えない」が33名(52%)で最も多く、「役立たなかった」と評価した学生は16名(25%)であった。一方、「大変役に立った」は6名(10%),「役に立った」は9名(14%)であった。自由記載では、『研究Ⅰがあったから発展できた』と評価する一方で、『研究Ⅰを理解していなため困った』『役立つ意味がわからない』『1年たち忘れてしまった』『出来ればⅠからⅡへ引き継ぐようにしてほしい』であった。

最後に「看護研究Ⅱの学習は今後の臨床や職場で役立つと思いますか」については「大変役に立つ」は18名(29%),「役に立つ」は31名(49%),「どちらとも言えない」は12名(19%),「役に立たない」は2名(3%)であった。自由記載では、『研究の一連のプロセスが理解でき役に立つと思う』『今後に活かせる研究と思った』『考え方や分析をし続けることを身につける場であった』また『もっと詳しく指導してほしかった』『研究Ⅰの学習が漠然としてわからなかった』『一人で行う不安がある』であった。

## 2. 教員による自己評価

「研究テーマの設定について」は、「よくできた」と評価した教員は0名で、「できた」は5名(45%)「どちらとも言えない」は6名(55%)であった。自由記載では、『学生のテーマ・興味がほぼ決まっ

ていた』『ディスカッションを重ね精度が高まった』『時間をかけた』『時間がかかった』『かなりの手助けが必要であった』『学生の文章表現力不足が大きかった』『教員が指導的にしたテーマだった』であった。

「研究テーマに関する文献検索およびクリティークについて」は、「よくできた」、「できた」と評価した教員は0名で、「どちらとも言えない」は6名(55%)、「できなかった」は5名(45%)であった。自由記載では、『クリティークまで至らなかった』『時間がなかった』『文献の種類、読み方などから指導した』『必要な文献は集めていた』『やや浅いが概ねできていた』などであった。

「研究計画書作成について」は、「よくできた」は1名(9%)、「できた」は2名(18%)、「どちらとも言えない」は8名(73%)であった。自由記載では、『文章表現、構成などかなり指導を要した』『看護研究Ⅰを想起させた』『ポイントを押さえ形になった』『倫理審査に時間がかかった』『学生の頑張りで精度が高まった』などであった。

「データ収集について」は、「よくできた」は2名(18%)、「できた」は3名(27%)、「どちらとも言えない」は6名(55%)であった。自由記載では、『指導は要したが主体的に行っていた』『時期としては厳しかった』『大変であったが大切なプロセスであった』『質問内容の吟味が浅く苦慮した』などであった。

「データ分析について」は、「よくできた」は1名(9%)、「できた」は1名(9%)、「どちらとも言えない」は8名(73%)、「できなかった」は1名(9%)であった。自由記載では、『初めてなので分析方法、まとめ方など指導を要した』『教員と学生が一緒に行った』『どれだけ理解したか疑問』『時間がなかった』などであった。

「研究論文の作成について」は、「よくできた」と評価した教員は0名で、「できた」は6名(55%)、「どちらとも言えない」は4名(36%)、「できなかった」は1名(9%)であった。自由記載では、『文章表現、論文構成など1から指導した』『時間がな

く十分に指導できなかった』『学生が主体的に協力し合い取り組んでいた』『メールでの指導という点から疑問』などであった。

「研究抄録の作成について」は、「よくできた」は1名(9%)で、「できた」は5名(45%)、「どちらとも言えない」は5名(45%)であった。自由記載では、『決められた字数に絞り込むことが難しく指導を要した』『学生が主体的に取り組んだ』『もう少し時間をかけて指導したかった』『論文と抄録を書く意味がわからない』などであった。

「研究発表について」は、「よくできた」は3名(27%)、「できた」は5名(45%)、「どちらとも言えない」は3名(27%)であった。自由記載では、『グループ間で練習し自信をもって発表していた』『時間に余裕がなく十分に指導できなかった』『主体的に発表会の運営ができていた』『他の発表を聞くことで学習効果があった』などであった。

「看護研究Ⅰの学習は役に立ったか」は、「大変役に立った」と回答した教員は0名、「役に立つ」は5名(45%)、「どちらとも言えない」は2名(18%)、「役に立たなかった」は4名(36%)であった。自由記載では、『研究Ⅰでの基礎的知識は役立っていた』『研究Ⅰでの学習内容をほとんど忘れており1から指導した』『研究Ⅰと研究Ⅱを積み上げる教育が必要』『判断できない』『文献検索ができなかった』『クリティークが不十分だった』などであった。

「今後の臨床や職場に役立つと思いますか」は、「大変役に立つ」は3名(27%)、「役に立つ」は5名(45%)、「どちらとも言えない」は3名(27%)であった。自由記載では、『研究のプロセスの学習は役に立つと思う』『研究方法を学ぶ意義はあるが自律してできるか疑問』『一連のプロセスは貴重な体験』『チームワークを維持することを学んだ』『看護を語ることができる』などであった。

表2 学生の自己評価

N=64

質問項目	評価内容	人数	%	自由記載内容の要約
研究テーマの設定について	よくできた	14	22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで話し合い協力して設定できた</li> <li>・興味あるテーマを設定できた</li> <li>・教員の助言で設定できた</li> <li>・研究Ⅰで学べたからできた</li> <li>・どんどん変わってしまった</li> <li>・難しかった</li> <li>・もっと考えればよかった</li> </ul>
	できた	27	42	
	どちらともいえない	20	31	
	できなかった	3	5	
	全くできなかった	0	0	
研究テーマに関する文献検索およびクリティークについて	よくできた	4	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ内で協力してできた</li> <li>・多くの文献を読み繰り返し行うことで理解できた</li> <li>・教員の助言、サポートからできた</li> <li>・研究Ⅰで行っていたのでできた</li> <li>・クリティークの方法を理解してなかった</li> <li>・実際に良かったか自信無い</li> <li>・文献が予想以上に集まらなかった</li> </ul>
	できた	17	26	
	どちらともいえない	40	63	
	できなかった	3	5	
	全くできなかった	0	0	
研究計画書作成について	よくできた	6	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間をかけ順序立ててできた</li> <li>・グループメンバーで協力してできた</li> <li>・教員の指導、協力でできた</li> <li>・研究Ⅰで行っていたのでできた</li> <li>・実習中で十分に力を入れることできなかった</li> <li>・表現があいまいな箇所があった</li> <li>・クリティークについて不安があった</li> </ul>
	できた	27	42	
	どちらともいえない	27	42	
	できなかった	4	6	
	全くできなかった	0	0	
データ収集について	よくできた	10	16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要なデータを得ることができた</li> <li>・グループメンバーで協力してできた</li> <li>・教員の協力で収集できた</li> <li>・PC、図書館で入手可能な文献が少なかった</li> <li>・十分なデータが収集できなかった</li> <li>・データ収集の方法がわからず戸惑った</li> </ul>
	できた	22	34	
	どちらともいえない	29	45	
	できなかった	3	5	
	全くできなかった	0	0	
データ分析について	よくできた	4	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の指導、助言でできた</li> <li>・グループメンバーで協力してできた</li> <li>・事前にできる方法を考えていた</li> <li>・分析方法を理解するのが難しかった</li> </ul>
	できた	24	38	
	どちらともいえない	32	50	
	できなかった	3	5	
	全くできなかった	0	0	
無回答	1	1		
研究論文の作成について	よくできた	8	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の指導、助言でできた</li> <li>・グループメンバーで協力、分担してできた</li> <li>・細かい箇所もできた</li> <li>・早めに取り組んだのでできた</li> <li>・間違いがあった</li> <li>・文章の内容、図の課題が多かった</li> </ul>
	できた	32	50	
	どちらともいえない	20	31	
	できなかった	4	6	
	全くできなかった	0	0	
研究抄録の作成について	よくできた	7	11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・論文を丁寧に作っていたので要点を書けた</li> <li>・教員の助言が大きかった</li> <li>・グループメンバーで努力した</li> <li>・まとめるのが難しかった</li> <li>・確認せず間違いがあった</li> <li>・論文に追われて大変だった</li> <li>・抄録の形式を早く教えてほしい</li> </ul>
	できた	27	42	
	どちらともいえない	26	41	
	できなかった	4	6	
	全くできなかった	0	0	
研究発表について	よくできた	18	29	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちの成果を時間内に明確に伝えることができた</li> <li>・事前準備をしてパワーポイントも工夫した</li> <li>・メンバーで協力してできた</li> <li>・当日、スライド等に不備があった</li> <li>・時間内に終わらなかった</li> <li>・質問や思った事をうまく言えなかった</li> <li>・12月は少し遅い気がした</li> <li>・時間、内容等はできたが課題が多かった</li> </ul>
	できた	22	34	
	どちらともいえない	20	31	
	できなかった	4	6	
	全くできなかった	0	0	
看護研究Ⅰの学習は役に立ったか	大変役に立った	6	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究Ⅰがあったから発展できた</li> <li>・役立つ意味がわからない</li> <li>・研究Ⅰを理解していないため困った</li> <li>・1年たち忘れてしまった</li> <li>・出来ればⅠからⅡへ引き継ぐようにしてほしい</li> </ul>
	役に立った	9	14	
	どちらともいえない	33	52	
	役に立たなかった	13	20	
	全く役に立たなかった	3	5	
今後の臨床や職場に役立つかと思いますか	大変役に立った	18	29	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究の一連のプロセスが理解でき役立つと思う</li> <li>・今後活かせる研究と思った</li> <li>・研究Ⅰ・Ⅱを思い出して頑張ります</li> <li>・考え方や分析を続けることを身につける場であった</li> <li>・もっとくわしく指導してほしい</li> <li>・研究Ⅰの学習が漠然としてよくわからなかった</li> <li>・一人で行う不安がある</li> <li>・わからない</li> </ul>
	役に立った	31	49	
	どちらともいえない	12	19	
	役に立たない	2	3	
	全く役に立たない	0	0	

表3 教員の自己評価

N=11

質問項目	評価内容	人数 %	自由記載内容の要約
研究テーマの設定について	よくできた	0 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生のテーマ・興味がほぼ決まっていた</li> <li>・ディスカッションを重ね精度が高まった</li> <li>・時間をかけた</li> <li>・時間がかかった</li> <li>・かなり手助け必要であった</li> <li>・学生の文章表現力不足が大きかった</li> <li>・教員が指導的にしたテーマだった</li> </ul>
	できた	5 45	
	どちらともいえない	6 55	
	できなかった	0 0	
	全くできなかった	0 0	
研究テーマに関する文献検索およびクリティークについて	よくできた	0 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリティークまで至らなかった</li> <li>・時間がなかった</li> <li>・文献の種類、読み方などから指導した</li> <li>・必要な文献は集めていた</li> <li>・やや浅いが概ねできていた</li> <li>・文献の読み間違い、理解不足があった</li> <li>・読み取る力が良い</li> </ul>
	できた	0 0	
	どちらともいえない	6 55	
	できなかった	5 45	
	全くできなかった	0 0	
研究計画書作成について	よくできた	1 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章表現、構成などかなり指導を要した</li> <li>・看護研究Ⅰを想起させた</li> <li>・ポイントを押さえ形にはなった</li> <li>・倫理審査に時間がかかった</li> <li>・計画書は計画過程を振り返る資料となった</li> <li>・完成度に拘らなくて良いと思う</li> <li>・学生の頑張りで精度が高まった</li> <li>・倫理審査は教員批判に感じる部分があった</li> </ul>
	できた	2 18	
	どちらともいえない	8 73	
	できなかった	0 0	
	全くできなかった	0 0	
データ収集について	よくできた	2 18	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導を要したが主体的に行っていた</li> <li>・時期としてはきびしかった</li> <li>・大変であったが大切なプロセスであった</li> <li>・質問内容の吟味が浅く苦慮した</li> <li>・調査票の配布、回収など段取りが必要</li> <li>・限られた時間では対象者にも焦りが出て回収率に影響</li> <li>・対象者との調整や説明など体験し研究への自覚ができた</li> <li>・あまり指導を要しなかった</li> </ul>
	できた	3 27	
	どちらともいえない	6 55	
	できなかった	0 0	
	全くできなかった	0 0	
データ分析について	よくできた	1 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めてなので分析方法、まとめ方など指導を要した</li> <li>・教員と学生と一緒にいった</li> <li>・どれだけ理解したか疑問</li> <li>・論文作成の過程で理解したと思う</li> <li>・実際に経験することが必要だった</li> <li>・時間がなかった</li> <li>・ソフトを利用し学生が主体的に行った</li> </ul>
	できた	1 9	
	どちらともいえない	8 73	
	できなかった	1 9	
	全くできなかった	0 0	
研究論文の作成について	よくできた	0 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章表現、論文構成など、1から指導した</li> <li>・時間がなく十分に指導できなかった</li> <li>・学生が主体的に協力し合い取り組んでいた</li> <li>・メールでの指導という点から疑問</li> <li>・グループで分担して書いたので参加しない学生もいた</li> <li>・プロセスの中で自分の考えを伝えていた</li> <li>・個々の学生の文章力を向上させるのに苦慮した</li> <li>・メールを活用してどうにかできた</li> </ul>
	できた	6 55	
	どちらともいえない	4 36	
	できなかった	1 9	
	全くできなかった	0 0	
研究抄録の作成について	よくできた	1 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決められた字数に絞り込むことが難しく指導を要した</li> <li>・学生が主体的に取り組んだ</li> <li>・もう少し、時間をかけて指導したかった</li> <li>・学生は「論文をみてほしい」と言っていた</li> <li>・論文と抄録を書く意味がわからない</li> </ul>
	できた	5 45	
	どちらともいえない	5 45	
	できなかった	0 0	
	全くできなかった	0 0	
研究発表について	よくできた	3 27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ間で練習し自信をもって発表していた</li> <li>・時間に余裕がなく十分指導できなかった</li> <li>・主体的に発表会の運営ができていた</li> <li>・他の発表を聞くことで学習効果があった</li> <li>・スライドで人に伝えるために作成する難しさがある</li> <li>・学会発表スタイルにした方がよい</li> </ul>
	できた	5 45	
	どちらともいえない	3 27	
	できなかった	0 0	
	全くできなかった	0 0	
看護研究Ⅰの学習は役に立ったか	大変役に立った	0 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究Ⅰでの基礎的知識は役立っていた</li> <li>・研究Ⅰの学習内容をほとんど忘れており1から指導した</li> <li>・研究ⅠとⅡを積み上げる教育が必要</li> <li>・判断できない</li> <li>・文献検索ができなかった</li> <li>・クリティークが不十分だった</li> <li>・質問紙作成の方法は全くわからなかった</li> <li>・研究理論に重点をおくと実践で足踏みする傾向がある</li> </ul>
	役に立った	5 45	
	どちらともいえない	2 18	
	役に立たなかった	4 36	
	全く役に立たなかった	0 0	
今後の臨床や職場に役立つと思いますか	大変役に立った	3 27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究プロセスの学習は役立つと思う</li> <li>・研究方法を学ぶ意義はあるが自律してできるかは疑問</li> <li>・一連のプロセスは貴重な体験</li> <li>・チームワークを維持することを学んだ</li> <li>・看護を語るができる</li> <li>・日常のケアを振り返る時間をもてる</li> <li>・教員と学生が語り合えた</li> <li>・役立つためには面白くなくてはいけない</li> <li>・学会発表は絶対にしたくないと言われた</li> </ul>
	役に立った	5 45	
	どちらともいえない	3 27	
	役に立たない	0 0	
	全く役に立たない	0 0	

## V. 考 察

「看護研究Ⅱ」の学習状況および指導状況を学生と教員の自己評価結果から研究のプロセス（質問項目）に沿って考察する。

### 1. 看護研究Ⅱの学習状況および指導状況

「研究テーマの設定について」は、60%以上の学生が「できた」と評価し、自由記載からもグループ内で話し合い協力して興味あるテーマが設定できたと学生の意見が尊重された様子がうかがえた。教員は45%が「できた」、55%は「どちらとも言えない」と評価していた。自由記載では学生の興味を尊重し、時間をかけながら話し合いにより精度が高まった一方で、学生の文章表現力不足等を指摘していた。寺崎<sup>8)</sup>は、学生は研究課題について漠然とした問題意識はあるが、その問題とは一体どういうものなのかを明確にしている場合が多く、焦点を絞り込む必要があると指摘し、学生と指導教員との対話から具体的にしていくことの重要性を提案している。また、香春<sup>9)</sup>や濱中<sup>10)</sup>岡田<sup>11)</sup>は学生の主体性を尊重することの重要性を指摘し、学生の「自分は何を知りたいのか、何を明らかにしたいのか」という姿勢を大切に学生の疑問や気になっていることを言語化し、意識化することから始めていると述べている。今回の結果からも時間をかけ学生間および学生と教員の対話からテーマが設定されていった状況が確認された。反面、少数であるが5%の学生が「できなかった」と評価し、『もっと考えれば良かった』『どんどん変わってしまった』『難しかった』また教員は『教員が指導的にしたテーマだった』という内容であった。研究は学生自身が主体であり、学生が納得できるように保証することが重要である<sup>12)</sup>。初学者の学生にとって最初の時点で、テーマや内容の絞り込みが不十分であることは当然であり、関心が徐々に変化していくこともある。思考の変化を学生自身が認識できるように文章化し、約半年以上をかけて取り組む課題であることから自分たちの関心を探求する楽しみを体験できるように課題や目的が精選されるように支援する必要

がある。

「研究テーマに関する文献検索とクリティークについて」は、学生、教員ともに「どちらとも言えない」と評価し、教員は「できた」と評価した者はいなかった。自由記載では、文献の種類や読み方から指導し、クリティークまで至らなかったと評価していた。学生もクリティークの方法を理解していなく自信がないと評価する一方で、研究Ⅰの学習をもとに繰り返し文献を読みグループ内で協力して行ったと評価していた。文献検索方法や文献クリティークについては、「看護研究Ⅰ」の講義や演習に組み込まれている。しかし、「看護研究Ⅰ」は教員全員が担当していないこと、講義内容や資料を共有していないことなどから学生の学習状況やレディネスについて教員間で認識の差が生じていたことが推測される。文献検索は前述した研究テーマの設定に関連し、学生が取り組みたい内容に沿いつつ、かつ研究に結びつけていく作業である。「文献を批判的に読む」能力を具体的にどこまで求めるかに関連し、「看護研究Ⅰ」の教育評価をもとに「看護研究Ⅱ」における文献検索およびクリティークの到達度をより具体的に教員間で共通理解しておく必要性が示唆された。

「研究計画書作成について」は、学生は50%以上が「できた」と評価し、教員は70%以上が「どちらとも言えない」と評価した。自由記載では、看護研究Ⅰにおける研究計画書作成の演習を想起し取り組んだ様子がうかがわれた。しかし、実習中で十分に時間がとれない状況で苦慮している状況も確認された。研究計画書は、研究テーマ・目的に関する関連文献を精読し、そこに至った過程を系統的にまとめ、目的を明確にするための方法の吟味と期間を含め、無駄なく研究を進めるための指標として実施・手順を示したものであり、緻密な計画書を作成することによりほぼ研究が完成したといわれるほど重要である<sup>13)</sup>。研究課題が明確になると必然的に方法論は選択されるが量的、質的あるいは実験いずれの方法論であっても初学者の学生にとっては大きなハードルとなる。教員



は、学生が実施可能な範囲を見極めながら指導することが求められる。この点、濱中<sup>14)</sup>は「学生は資料収集の過程でも身をもって学ぶことが少ないので実験研究、面接法など、できるだけ学生の手による学生自身を活用できる研究方法を進めている」と述べている。また今日、研究対象者への倫理的配慮は厳しく問われており、井上<sup>15)</sup>は、「同意が得られた対象者に対し」、「対象者の同意を得た」の一文もしくは一語のみが定型句のように添えられている論文が依然として多いと指摘している。倫理的配慮は学生であっても研究者の立場から不可欠な要素であり、研究協力者にわかりやすく説明し、結果をどのように伝えていくか、また活用するかを含めて指導が必要といえる。

「データ収集」「データ分析」については、学生、教員ともに「どちらとも言えない」と評価し、自由記載からも限られた時間のなかで研究対象の選択や依頼を含めて試行錯誤している状況がうかがえた。また、文献検討の場合は学内の図書館では入手可能な文献が少ないことから文献依頼等に苦慮した様子もあった。データ収集の協力施設や協力者との交渉は、最終責任は担当教員であるが具体的な依頼に関しては基本的に学生が行う。香春<sup>16)</sup>は、「学生の研究であるから自らが説明することが大切であり、自分の言葉で他者に説明し質問を受けていくというプロセスをとることで対社会的に自分の研究に責任を負うことを経験する。」と述べているように学生の研究への取り組み姿勢を作り、達成感につながるためにも重要なプロセスといえる。

「研究論文の作成」「研究抄録の作成」は、学生、教員ともに50%以上が「できた」と評価していた。自由記載からは、学生は教員の指導を受けグループで協力、分担し取り組んでいた。反面、文章表現や図の表現方法など課題も見出していた。同様に指導した教員は、文章表現や論文構成など1から指導を要したと指摘し、特に文章作成の指導には苦慮し時間がないことも相俟って十分に指導できなかった状況が確認された。卒業論文において

は論文の本質や土台となるものを教育過程の段階に沿って、学習の積み上げをしておく必要性が指摘されている<sup>17)</sup>。また、そのためには入学時からさまざまなテーマで課せられるレポートは、文献学習で自己の考え方を深め、新たな方向性を模索する学習法でもあり、学生がテーマに対し興味や情熱をもって取り組めるような方向づけが必要といわれる<sup>18)</sup>。本学科の教育目標とカリキュラム構成と関連して、論理性と批判的思考をどのように育むか、看護研究ⅠとⅡの位置づけと1年次からの関連科目を明確にしておく必要性がある。

「研究発表について」は、学生、教員ともに60%以上が「できた」と評価していた。学生の自由記載からはメンバーで協力してパワーポイントを準備し自分たちの成果を明確に伝えた達成感とともに当日のスライド不備や質問に適切に対応できなかった残念な思いも表現していた。一方、教員は学生が主体的に発表会を運営し、他の発表を聞く学習効果を評価していた。研究発表の形態は、各大学で工夫しポスターセッションを取り入れたり看護研究論文を雑誌に投稿するなどさまざまである<sup>19)</sup>。本学では看護研究発表会は、今回はじめての試みであるが、学生の評価と自由記載から学習成果を何らかの形で「発表」することは学生の達成感に大きく影響を与えているといえた。

また、「看護研究Ⅰの学習が役に立ったか」については、学生は「どちらとも言えない」が最も多く50%を占め、「全く役に立たなかった」が5%、「役に立たなかった」は20%であった。看護研究ⅠからⅡへ引き継ぐようにしてほしいという自由記載もあり、教員の研究ⅠとⅡを積み上げる教育の必要性という自由記載同様にその意義を明らかにする必要性が問われた。

最後に「今後の臨床や職場に役立つと思うか」では、学生、教員ともに70%以上が「役に立つ」と評価し、自由記載では看護研究Ⅱの学習目標である研究のプロセスは今後、役に立つと評価していた。また、教員と学生が約半年間の学習を通して語り合った意義やグループ学習としてのチーム

ワークの効果も記載されていた。さらに考え方や分析し続けることを身につける場であったなど看護研究の意義や卒業後の活躍が期待される内容もあった。反面、研究を一人で行う不安やもっと指導してほしいなどの希望も記載されていた。臨床現場においては、学士課程の卒業生には看護研究ができるという能力を期待しているという現状がある<sup>20)</sup>。一方で看護実践能力の向上が求められている。看護基礎教育のなかで「看護研究」を通して、どのような能力を獲得することを目指すのか教員間でしっかりと共通認識をして設定する必要性を痛感する。

## 2. 今後の課題

以上より、今後の課題として学生が研究に取り組むための基礎能力としての文章作成、文献精読の教育の必要性、看護研究ⅠとⅡの教育目標と教授方法の検討、また教員間で学生の学習状況およびレディネスについて共通認識するための教育評価の必要性が明らかとなった。

今後は、本学の教育理念および教育目標の具現化として「看護研究」科目の位置づけの明確化、他の科目との関連を明らかにし4年間の積み上げを意識した系統的なカリキュラム構成の明確化が必要といえる。そして、何よりも教員間で、どのような学生を育てたいのか、研究を行うために必要な能力とは何かなど、共通認識をもつためには、日々の教育について率直にディスカッションしていく場の設定や丁寧な教育評価の積み重ねが必要といえる。

## VI. 研究の限界

今回は、あくまでも学生と教員の自己評価結果からの評価であり、客観的評価は取り入れていないため教育評価として言及することはできない。今後は、研究テーマや研究方法の傾向、客観的評価を含めての教育評価の検討が必要である。

また、今回は教員の回収率が65%と低く全教員の意見が反映されなかったことは残念であった。

## VII. おわりに

本調査にご協力いただいた第一期生の学生と教員の皆様にお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 厚生省健康政策局看護課編集：看護カリキュラム－21世紀に期待される看護者のために－。東京，第1法規出版，1989.
- 2) 寺崎明美：卒業論文指導の留意点。Quality Nursing, 5 (1) : 4-8, 1999.
- 3) 中村郷子，古瀬みどり：看護系大学生の卒業研究における課題探求プロセス。日本看護研究学会誌, 30 (1) : 89-95, 2007.
- 4) 古城幸子，木下香織，栗本一美，岡宏美：3年課程看護学生「看護研究」への取り組みと教育評価－本学の2000年から2004年の5年間の分析－。新見公立短期大学紀要, 26 : 51-60, 2005.
- 5) 小野晴子，杉本幸枝，栗本一美，岡宏美，古城幸子，宇野文夫，難波正義：質の高い看護職養成のための看護研究－主体的課題発見能力を育てる学習支援－。新見公立短期大学紀要, 28 : 167-176, 2007.
- 6) 日本私立看護系大学協会「大学における教育に関する事業」：学士課程における看護研究の教育目標・教育方法。日本私立看護系大学協会, 1-51, 2008.
- 7) 前掲書：6) 3-23.
- 8) 前掲書：2) p.5.
- 9) 香春知永：学生の課題探求能力と態度の基礎を育む指導。Quality Nursing, 5 (1) : 9-14, 1999.
- 10) 濱中喜代：学生の主体性を尊重した研究プロセスの指導。Quality Nursing, 5 (1) : 15-19, 1999.
- 11) 岡田由香：学生の希望を尊重した研究テーマの設定。Quality Nursing, 5 (1) : 34-39, 1999.
- 12) 前掲書：10) p.17.

- 13) 前掲書：2) p.7.
- 14) 前掲書：10) p.17.
- 15) 井上智子：看護研究を倫理的に進めるために  
実りある看護研究のための倫理的配慮と倫理  
審査のあり方. インターナショナルナーシン  
グレビュー, 27 (2)：28-30, 2004.
- 16) 前掲書：9) p.13.
- 17) 前掲書：2) p.4.
- 18) 前掲書：2) p.4.
- 19) 川口孝泰：主体的思考力を養う卒業研究の指  
導. Quality Nursing, 5 (1)：20-24, 1999.
- 20) 前掲書：6) 42-43.

## A Study of Educational Evaluation of Nursing Study II

— Using the self-rating reports by the faculty members and students —

INOUE Yukiko and NAGATANI Tomoe

**Abstract:** The objective of this study is to examine the learning and teaching situations of the "Nursing Study II" course offered to the first year students enrolled in Bunkyo University's four-year nursing program, by analyzing data from self-evaluations made by students and faculty members. The subjects were 64 students and 11 faculty members involved in the course and who gave written consent for participation. We originally created a self-rated questionnaire comprised of ten evaluation items that inquire about the learning and teaching situations pertaining to the nursing study process. As a result, 60% or more of the students and 45% of the faculty members replied, "Yes, I was able to set-up a research theme." However, both the students and faculty members rated "text critique" low, disclosing difficulty in reading text carefully and demonstrating the necessity of instruction in text reading. Pertaining to "writing a research plan," students replied, "Yes, I was able to write a research plan." On the other hand, the faculty members' simple "Yes" and "No" answers revealed the necessity for more instruction in verbal expression. When asked to elaborate about "Data collection" and "Data analysis," the written comments revealed circumstances where both students and faculty members struggled with time limitations. For "research paper creation," "abstract creation," and "presentation," 50% or more of the students and faculty members replied, "Yes, I was able to do it," and 70% or more rated these items as useful for future clinical situations. Findings also indicated the necessity to emphasize the importance of accumulating knowledge through "Nursing Study I" and "Nursing Study II."